

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第27号

2016年11月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65
日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会
・ジェンダープロジェクト

Tel 03-5228-3171

発行責任者: 篠田 茜

沖縄の現状と女性

正義と平和委員会委員長 主教 ダビデ 上原榮正 (沖縄教区)

沖縄にいますと、日本本土に比べて、沖縄人(ウチナーンチュ)の人権が軽視されている場面によく出会います。最近では、大阪から辺野古へ派遣されてきた機動隊員が、沖縄人に、「土人」「シナ人」と発言し、問題になっています。でも、女性の方は、人権も人格ももっと傷つけられているように感じます。何故そうなるのか、今沖縄で起きている世界一危険と言われる普天間基地の返還に伴う辺野古移設から考えてみたいと思います。

沖縄では、米軍人による事件事故が毎年1000件起きています。軍事訓練中の事故、交通事故、強盗、暴行、強姦、殺害などです。普天間基地返還は、1995年の3人の米兵による女子暴行事件がきっかけでした。沖縄への過剰な基地負担が事件を引き起こしたとして、当時のクリントン大統領と橋本首相との間で、世界一危険な普天間基地の返還が決定されました。しかしSACO(沖縄に関する特別行動委員会)では、普天間返還は無条件ではなく、基地機能移設の条件付きとなりました。沖縄県は、日米安保条約が大切なら米軍基地も平等に負担すべきだと、県外移設を主張しています。でも本土側は米軍基地が来ると危険になるからと、引き取ろうとしません。政府は地政学的にも海兵隊基地は沖縄が唯一と決めつけ、米軍基地を押し付け、工事を進めています。移設先とされた辺野古やヘリパッドの建設地の高江では、座り込みや阻止行動が行われています。SACO合意で普天間基地が問題になってから、沖縄県内では、衆参議院選、県知事選、県議選、名護市長選、名護市議選などすべての選挙で辺野古移設反対派らが勝利し、民意を示しました。現在、沖縄選挙区からの自民党出身の国会議員はいません。それでも、政府は辺野古移設を諦めません。

今年の5月、女子学生が米軍属に暴行殺害事件が起こり、安倍首相が来日中のオバマ大統領に強く抗議をしたとして、事件の幕引きが日米間で行われました。民進党は蓮舫氏が代表となりま

したが、辺野古の移設を容認しています。米軍基地があることで、沖縄が危険にあっても仕方がないというサインです。選挙に勝つには、自民党であれ民進党であれ、国民の1%の沖縄県民よりも、99%の大和人の民意を優先させるということでしょう。これが、民主主義ですか。尖閣問題では、再び沖縄が戦場になりそうです。

最近本土のマスコミは、辺野古の報道も含め、沖縄のことを殆ど報道しなくなりました。でも、沖縄で女性が暴行、殺害、強姦されるなど事件が起きると、ここぞとばかりに沖縄が問題となります。私の穿った見方かもしれませんが、沖縄で女性が被害に遭わなければ、米軍基地の問題は問題としない、これが、本土側の沖縄県民と女性へ扱いのように感じます。

イエスさまは、いつも弱く貧しくされた側の味方でした。教会が立つべき立場は、明らかです。



第60回国連女性の地位委員会に出席して

リグリマ・ジャパン代表 上澤伸子（東京教区）

1 今年度テーマ「女性のエンパワーメントと持続可能な開発の関連性」

今年の3月13～24日までニューヨークで開かれた第60回国連女性の地位委員会（以後、CSWと省略）に、もう一人の派遣者である福澤真紀子さんと共に参加した。

派遣を促された時から、自分が何を求められているのか、どう応えたらよいのかわからずたいへん悩んだ。派遣者に求められた課題は、①政府、国際機関、NGOが主催するセッションへの参加や、ロビー活動、アドヴォカシー活動、②聖公会中央協議会の会合への参加、③聖公会派遣者が、各国、各教会、各自の視点からカンントリー・レポートを発表し、今年度のCSWのテーマに沿って討議することだった。これらすべてをこなすには、スーパー・アングリカン・ウーマンか、UNCSWに10回以上参加した経験者でない無理、と行く前から途方にくれた。

アングリカン・コミュニオンの派遣者でありながら、自分は教会活動には熱心ではないし、国内や教会内のジェンダー不平等に関する問題に継続的にかかわってこなかった。どうやら自分は②と③の課題にはそれほど貢献できそうにない。バングラデシュの草の根女性グループを運営する自分が、唯一の得意分野は途上国支援。となると、課題①のなかでも途上国支援を扱うセッションに参加し発信することならできるかもしれないと考えた。CSW全体の報告は歴代参加者の方々がなさっているので、本報告はエキュメニカル・イベントの参加と日本からの発信に焦点をあてることにした。



全インド女性会議の平行イベント

会期中 450 以上あるエキュメニカル・イベントのうちいくつかに参加した。その中でもっとも印象深かった全インド女性会議主催の「排除され周縁化された人々を力づける：挑戦と成功」を紹介する。司会者によれば、「これまで開発する者とされる者とのギャップがあった。周縁化された人びとはつねに上からのニーズを押し付けられ、内発的に動かされてこなかった。開発にたずさわる者は、このような人びとに敬意を払い理解することや、人びとの必要なもの

を知ることから始めるのが重要である」と考え、イベントを主催したという。

登壇者の1人である全インド女性協会の創始者は、誰が周縁化されているかを草の根レベルで知ることの重要性を説いたのち、「インド憲法ではすべての人が平等であり尊厳が守られることを保証しているが、現実にはカーストで分けられ、人びとの間にはそれが運命であるという考えが染み込んでいる。全インド女性会議はこの考えを改めるために、活動に参加するよう女性たちに促した。初めは家庭を壊すからと夫に参加を止められたが、小規模融資を借りて子供服が買えるようになると、夫も文句を言わなくなった」と述べ、小さなことから始めて徐々に家庭内のジェンダー構造を変えていく可能性を示した。

コルカタ出身のトランスジェンダーの方は、当事者の視点から開発機関による無理解とギャップについてこう述べた。「自分はインド社会の家父長制とマスキュリニティから抑圧を被っている。自分で自分の指向は止められないが、社会が自分の指向を止めようとする。開発機関はジェンダー平等に熱心に取り組むと同時に、トランスジェンダーにもリハビリテーションを施そうとする。しかし、当事者たちはリハビリを受けたいと思っていない」上から目線の開発に対して「ノー」を表明したスピーチに対して、聴衆から拍手が送られた。

2 日本からの発信： 平行イベント「いのちと環境をまもる」

今年度の派遣者の最大のミッションは、初めての平行イベント「いのちと環境をまもる——放射能の脅威にさらされる福島的女性と、バングラデシュ災害常襲地域の少数民族女性をつなぐ」の開催だった。平行イベントでは、はじめに上澤が「女性たちの災害の経験と知識」と題して、バングラデシュ災害常襲地域に住む少数民族ガロの女性たちについて三つのことを話した。第一に、平常時から社会的に弱い立場にある人びとは、災害時にいっそう不利な立場に追いやられるということ、第二に、ガロの女性たちが社会的資本の乏しいなか、災害に関する過去の経験や、在地の知識を駆使して生きていること、第三に、それらの経験や知識を十全に活かすことによって、いのちと環境が持続的に守られていることである。以上の点を、草の根グループ「リグリマ」による池の再生プロジェクトと改良かまどプロジェクトの事例をあげて説明した。

最後に、女性たちの身のまわりの世界、つまり生活環境を守ることが、そこに生きる女性たち自身を守ることにつながり、その反対もしかりであると述べて話を終えた。



日本聖公会の平行イベント

次に、福澤さんが原発問題と放射能の脅威について「福島的女性からの声」と題して話した。福澤さんは放射能汚染に関する正確なデータや証拠を示し、年齢層も居住場所も異なる被災女性が語る体験談を紹介して、説得力のあるスピーチを行った。

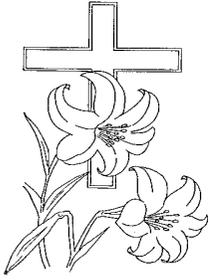
バングラデシュと日本とでは、社会経済的な差異があるが、開発政策・災害復興政策の立案、実行では、社会の周縁に置かれた人びとへの配慮に欠けている点

が共通している。政府はいまだに道路、橋、堤防などの大型建造物の建設を最優先にしている。市民社会と連携することもなく、農村部に暮らす人びとの声を聴こうともしない。取り残された人びと、とくに女性たちは自分のことを後回しにして、家族や肉親のいのちを守ろうと苦闘している。開発を進める側は、女性たちのニーズを尊重し、想像力をもって政策立案や開発援助を行うべきであると締めくくった。

セッションの参加人数は30名と、程よい人数の中で話すことができた。発表後の質疑応答からは原発問題に対する海外の方々の関心の高さが見てとれた。詳しくは原発問題プロジェクトのホームページ(<http://nssk.org/province/genpatsugroup/2016/08/25-4/>)に掲載されている。

UNCSW (国連女性の地位委員会) : 戦後できた国連は女性の人権を重視し、経済社会理事会の中に、政治・市民・社会・教育分野等における女性の地位向上に関し、経社理に勧告・報告・提案等を行う女性の地位委員会を設置。毎年2~3月頃に2週間の期間でその年のテーマを軸に年次会合を開催。ACCも国連オブザーバーであり、この会合に代表団を送っている。日本聖公会からも2005年以降毎年2名を派遣している。





追悼

管区正義と平和委員会委員、ジェンダープロジェクト／アドバイザーメンバー、NCC女性委員会委員長、ハンセン病患者胎児等標本問題に取り組む「くるみくるまれるいのちのつどい」共同代表等を務めてこられた松浦順子さん（東京教区）が今年8月に亡くなりました。『「女性」が教会を考える会・東京』のメンバーとしても多くの女性たちを励ましてこられた松浦さんを偲び、長年の親友、夏目和世さんに追悼文を寄せていただきました。

.....

～松浦順子さんを偲ぶ～

夏目 和世（北関東教区）

みなさまの記憶にある順子さんは、おそらくセンスとバイタリティーに満ちあふれ、NCC 女性委員会委員長をはじめ様々な責任ある立場で、教会の枠を超え国境も超えて、あらゆる差別や暴力に対抗し、弱いもの、痛んでいる者に心を寄せて働き続けた方なのではないでしょうか。妥協を許さない毅然とした態度は時に誤解を受けることもあったかも知れませんが、彼女の優しさや暖かさに触れたものは誰も尊敬と愛を惜しまなかつたはずです。

5, 6年前、まだまだ元気印だったころ、彼女は自分の活躍の軌跡に関する資料を、整理処分なさいました。私が惜しむと、「私がやったということなど、どうでもいいこと」と割り切りも彼女らしく、時を同じようにして、「祈りを分かち合う友」を呼び集められました。私にとっては、62年に及ぶ祈りの友でありました。

多くの活動から距離を置かれたと言っても、「くるみくるまれ…」の活動の一環として、生まれてくることが許されず、産着を着ることが出来なかったハンセン病患者さんの胎児たちのために、有志に呼びかけ、縫い上げられたたくさんの産着を展示して、国の暴挙と母たちの悲しみを世に訴えるための場所探しには奔走を続けられていました。また、彼女の行動の原点とも言うべき『「女性」が教会を考える会』が作り続けてこられた祈り集、「こころを神に」の作成には力尽きるまで努力されました。夏の暑さで辛かつたはずの6月末ころ、パソコンに向かい「これだけは書き終えたいのに、すぐ疲れてなかなか進まない」と嘆いておられた姿は忘れられません。手元に、届けて頂いたばかりの「こころを神に」の最新版があり、その中に彼女が命がけで書かれた二つの祈りが収められています。一つは友人、東海林路得子さん（「アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館」(WAM) 元理事長）、打田茉莉さん（東京教区人権委員会元委員長）を送られた後から心に暖めておられた「先立って逝った姉妹たちを覚えて」（※）で、い

くつかの不思議な偶然を経て葬儀の準備をしておられたご家族の元に届き、彼女の通夜・葬儀の刷り物の中に、緑色の美しい紙に刷られてさりげなく挟まれ、一番最初に順子さん自身のために祈られたのです。もう一つの祈り「大人になれなかった子どもたちを覚えて」（※）は、産着を着せてあげたかった胎児たち始め、幼くして命を奪われた子供たちを深く心に刻んで書かれたものです。産着の展示を希望していた施設では許可が下りず、心残りだったろうと思っていたところ、木川田さんが関わっているピースフェスタでの小規模ながらの展示が8月と決まり、その日時が奇しくも彼女の葬儀直後の主日だったことを知りました。この二つの偶然が、順子さんの人生への天よりの祝福と労りの様に感じられるのです。また、この二つの祈りが、私への、私たちへの彼女の遺言のように迫ってくるのです。



「くるみくるまれるいのちのついでに」展示の様子（於 紀南ピースフェスタ 2016）

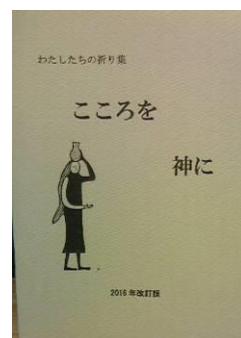
※これらのお祈りは、『わたしたちの祈り集 ころを神に』
（「女性」が教会を考える会・東京／2016年改訂版）に収録されています。

ご希望の方は、下記にお申し込みください。

前田恂子 TEL&FAX 0422-38-5665

西川華織 kaorinn@ka3.so-net.ne.jp

1部 500円 3部以上で送料無料。





第24回聖公会女性フォーラム

篠田 茜（京都教区）

7月17日、18日に「彼女を記念してII in Hokuriku」というタイトルのもと、27名が集まりました。今回は金沢、福井のメンバーが中心となり福井聖三一教会で行われました。「聖公会の150年：おんなたちは何処にいたか」と題して、聖公会における婦人伝道師の歩みについて、アグネス北川規美子さんに話していただきました。

「婦人伝道師」というと、男性の司祭が働きやすいように教会内をハードもソフトも整える（「牧師夫人」と同じような、でも少し専門的な）というイメージだったのですが、それは思い込みであることが判明しました。その働きは初期の伝道所、講義所での伝道活動だけでなく（あるいはそれと並行して）、ミッションスクールや孤児院、ハンセン病や結核療養所での仕事、また海外伝道など、そして聖卓関係の刺繍やウェファース焼きなど多岐に亘っています。現在の教会の付属施設での多くの働きに当たるものであり、わずかですが、海外の神学校に留学して学んでいる方がいたのも驚きでした。決して「下働き」ではなく、主体的に責任と誇りをもって活動していた姿は、今の教会に集う女性たちよりも生き生きとしていたかもとさえ、思われました。

2日目の分科会のテーマは「教会の女性の歴史をどのように伝えていくか」、「これからの女性団体—どうしたい?」、「意思決定機関～男性中心をどう変える?」、「教会におけるセクシュアリティを考える」、「教会女性と平和—核・基地・憲法など」でした。教会生活を送る中で、言葉にはしにくいけれど感じることを言葉化してみることで新たな気づき生まれ、一人ひとりの行動にまで続けばと思います。

閉会聖餐式は女性の聖職者4人で行われ、マグダラのマリアが復活のイエスさまとの出会いによって嘆きから立ち上がったように、フォーラムでの出会いを通して見出した希望によって、わたしたちも日常へ派遣されるという中尾貢三子執事のお説教でした。

4半世紀近く続く女性フォーラム、名簿には107名の名前が載っています。この中には亡くなられた方、案内の封筒が戻ってきた方などもあり、時の流れを感じました。多くの人が関わり、これからも順送りにつなげることができる女性フォーラムの集まりでありたいと願います。

来年は7月17日（日）、18日（月・海の日）、東京教区聖パウロ教会で開催される予定です。

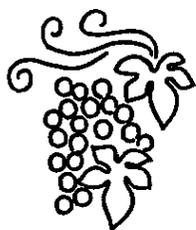


教派を超えたつながりの中で

司祭 セシリア 大岡左代子 (京都教区)

今夏、西南学院大学神学部における実践神学B集中講義(8月29日～9月1日)および「第2回 性と人権全国キリスト者連絡会議」(9月18日～19日)に参加する機会が与えられました。西南学院の集中講義は、日本バプテスト連盟(以下、バプ連と表記)の各委員会と西南神学部との協働で行われているもので、今年は性差別問題特別委員会の担当でした。内容は、バプ連の性差別問題特別委員会ができた経緯・働きを知ることから始まり、「牧師夫人」「女性の牧師」に関する課題、沖縄のこと(特に現在の状況と女性への暴力の問題)、教会におけるハラスメント(特にセクシュアル・ハラスメント)について、セクシュアル・マイノリティーについて、「婚姻制度」について考えるなど「性」や「ジェンダー」に関わる多岐にわたる課題について講義を聞き、思いを分かち合うというものでした。その中には「どう読むか聖書・ジェンダー編」、「セクシュアリティ編」が織り込まれ、フェミニスト神学的な聖書の読み方にチャレンジする場面もありました。参加者は現役の神学生、そして近隣の教会の信徒、牧師など多彩な顔触れでした。

また「第2回 性と人権全国キリスト者連絡会議」(於：シーパル須磨)には様々な教派から約60名が参加。「教会の異性愛主義と向き合う」というテーマのもと、先ず堀江有里さんによる主題をめぐるトーク「教会の異性愛主義と向き合う～怒りの共同性にむけて」を聞きました。二日目はテーマに基づいた3名のパネラーによる発題とディスカッションがあり、参加者のおかれたそれぞれの立場、環境から活発な意見交換がなされました。2012年に第1回会議を開催して以来4年ぶりの開催でしたが、前回同様、教派を超えて知恵と力をあわせて真に人権が尊重され平和を作り出す社会にむけて共に歩みたい、という強い願いが参加者の中には溢れていました。これら二つの教派を超えたつながりの中でわたしが感じた共通の課題は「教会の異性愛主義にどう向き合うか」また、未だに根強い「ジェンダーによる思い込みからの解放をどう実現するか」でした。「異性愛主義」・・・性的マジョリティーの側にいるわたし自身が問われていることを明確にしてくれる言葉です。しかし、それは決してそのようなあり方を否定されているのではなく、それを「当たり前」として異性愛者でない者を排除する現実を問われている、特に教会によって排除されている現実が問われていることを再確認しました。そこには「ジェンダーによる思い込み、偏見」が根強くあるのです。さらにこれらのことは突き詰めていくと「結婚とは何か?」「婚姻制度とは?」「家族とは?」ということに行き着くのではないかと強く思いました。教会(キリスト教)がもつ「結婚観」「家族観」について問い直すことは、かなりハードルが高いかもしれませんが、今後の課題として取り組む必要があると実感した夏の経験でした。



大韓聖公会女性宣教センター開所祝福式！

～ 韓国/ソウル 9月3日～5日 ～

女性デスク 木川田道子（京都教区）

8月初旬、日本聖公会 GFS100 周年記念礼拝（於：京都）でお会いした大韓聖公会両性平等局デスク、チェ・ルシアさんから、女性宣教センターがいよいよ開所の運びとなったことを聞きました。聞けば着想から 21 年目とのこと。女性たち自身の力で、宣教のための活動拠点を実現させるなんてすごい！—どこに？どうやって？資金は？活動内容は？ビジョンは？・・・机ひとつ持たない NSKK 女性デスクとしても、これはぜひ行ってお祝い方々パワフルな大韓聖公会の女性達の働きを知りたい、と開所祝福式へのお誘いをいただいたのを幸いに 3 日間という慌ただしい日程ではありましたが、韓国ソウルへ向かうことにしました。

到着 1 日目にはキム・キリ司祭に案内していただき、まずはソウル市内にある 2012 年開館の「戦争と女性の人権博物館」へ。ここは日本軍「慰安婦」についての歴史と戦時性暴力をテーマとした体験型ミュージアムです。展示の順路通りに進んでいくことで苦難の道を歩かされた女性たちの生涯を感じることができます。暗い 1 階から抜け出した 2 階のベランダでは、亡くなられた「慰安婦」とされた方々の写真が並び、献花するコーナーがありました。私は残っていた白い大きな百合の花を一番最近亡くなった方の花入れに挿しました。勇気を振り絞り、沈黙を破ったこれらの女性たちと、それを自分の事として支え続けた日韓の女性達などによってこの博物館ができたことを思うと、重くてしんどい歴史ではあるけれど、そこから歩み出した女性たちの強さと希望、そして誇りをも感じられる場所でした。

翌主日の礼拝はソウル市中心地にあるソウル大聖堂へ。教会の敷地内には脱北した女性の生活を支援するために大韓聖公会 GFS が開設したカフェ・グレースがあり、近隣の人たちで賑わっていました。教会の会館の一室には、教会グッズを売るお店があり、販売を担当する GFS の皆さんと話す機会がありました。戦後、日本聖公会から伝えられて大韓聖公会 GFS の活動が始まったとのこと。

朝鮮半島の分断という状況が続く中、困難の中にある女性たちと共に歩む GFS の皆さんの働き的一端を知ることができました。午後からはいざ祝福式へ。市内中心地からは少し離れます



カフェ・グレース

が、高級住宅地の一角、3階建ての瀟洒な一戸建てが女性宣教センターでした。金根祥主教によって建物が清め祝福され、歴代の設立準備会の会長を務めた方々のスピーチが続きました。21年前に始まった女性たちの願いは、準備会の会長を交替しながら引き継がれ、構想も練り直されながら、こつこつと資金が集められて今日に至ったとのこと。当面の活動としては、子どもを失った母親の会、やさしい日本語での聖書研究会、英会話教室、特別講義、教会の中の女性のリーダーシップ養成のための両性平等認識プログラム、UNCSW/ACC 代表団会合報告会、若い女性の教育、リトリート、女性団体の会議、セミナー、ゼミ等に使用される予定ということでした。私たち、女性デスクからも日本聖公会を代表してお祝いの言葉を述べ、「韓日聖公会宣教協働30周年記念大会」共同声明で確認されたように、女性たちが互いに学び合い、家父長制が大きく影響している東アジア地域の社会において、女性の地位向上のために連帯することで、新たな歴史の扉が開かれることを信じ一緒に歩んでいきましょうと挨拶しました。



大韓聖公会女性宣教センター全景



祝賀パーティーの様子

礼拝後のパーティーでは、伝統のお祝いの米菓子「トック」のケーキカットも行われました。約300人を超す参加者で、聖職も各地から27名参加されたと後で聞きました。

3日目には数年前まで東京教区に出向されていた柳時京司祭に通訳に入っただき、両性平等局長のルシアさんと互いの管区の仕組みや女性に関する課題について情報と意見交換を行い、来年の日本でのミーティング実現の可能性などについて話し合いました。



伝統のお祝いの米菓子「トック」のケーキで女性宣教センター祝福式と飾ってある。

日韓の教会は、教区間で、あるいは各団体や個々での交流はあっても、女性の課題を軸に連携を取るところまでにはなかなか至っていなかったと思います。国同士の歴史的経緯、また互いの教会の歴史からも学びながら、どのような協働が可能なのか一緒に考えていけると思います。



女性デスクから



ジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン

毎年 11 月 25 日から 12 月 10 日までの 16 日間は、「ジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン」として、世界各国でさまざまな活動が行われています。国際聖公会女性ネットワーク (IAWN) もこのキャンペーンに参加しており、ジェンダーに起因する暴力(性差別と結びついた主に女性と少女に対する暴力)を根絶するための取り組みをするよう呼びかけ、その活動内容を分かち合うよう各管区に求めています。日本聖公会でも 2011 年からこのキャンペーンに連帯するため、管区女性デスクより代祷のお願いをしてみました。

女性に対する暴力は、緊急の対策を必要とする世界的な問題です。今も女性は世界中で差別と暴力を受けています。世界的に見て 3 人に 1 人の女性が一生のうちになんらかの暴力や虐待を受けているといわれますが、その事態は日本に暮らす私たちとも無縁ではありません。「男女間における暴力に関する調査」(内閣府調査報告 2015)によると、日本では配偶者からの身体的暴力、心理的攻撃、性的強要いずれかの暴力を受けた女性配偶者は、全体の 23.7%、約 4 人に 1 人の割合になっています。女性の権利を侵害する暴力を防止するため、また暴力を受けている女性と少女が適切な保護/援助を受けられるようにするために、今後もいっそうの取り組みが必要です。

今年も 11 月 25 日から 12 月 10 日までのこの「ジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン」のことをおぼえ、次のお祈りを代祷に加えてくださいますようお願い申し上げます。

…心と身体が傷ついている人びとのために…

生きる力を与えてくださる神さま

わたしたちの社会も教会も

多くの差別と暴力を黙認し 長い間受け入れてきました。

イエスはすべての人の尊厳を尊ばれ、いのちを回復されます。

心と身体が傷ついて苦しみ 痛みと怖れの中にいる人びと、

ことに女性と少女たちに、

声をあげる勇気を与えてください。

あなたの癒しによって

希望を見出すことができるように導いてください。

そしてわたしたちが 小さな声 声にならない声に耳を傾け

共に生きることができますように。

わたしたちと一緒に祈ってくださるイエスのみ名によって。

アーメン

(『わたしたちの祈り集—こころを神に』「女性」が教会を考える会・東京/2016年改訂版より)

※東京教区では、12月1日(木)19:30~聖アンデレ主教座聖堂において「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」礼拝が、司式:大畑喜道主教 説教:笹森田鶴司祭によって行われます。ぜひご参加ください。



ジェンダープロジェクトより

長きにわたりジェンダープロジェクトのリーダーとして、また正義と平和委員会の委員として働いてこられた大岡左代子さんに代わり、今総会期から篠田がその任に就くことになりました。いったいこんな責任を果たせるのか、改めて自分の「ジェンダー意識」を振り返っています。「けっこう意識しているほう」と思っている、そうではないことに気づかされることがあります。数年前のどこかでの研修で、出世のための異動を打診されたことをめぐって、夫婦が子どもや家事をどうすればいいかについて会話している4コマほどの漫画を見ました。「出世のための異動」をするのは「夫」だと思い込んでいたわたしでしたが、実はそれは「妻」だったという内容でした。実に初歩的な思い込み！で、けっこうショックでした。それ以来、何かの時に思い出します。多くの人が深いところに気づかない思い込みを持っており、それを変化させるのは、自分のことでも簡単ではありません。偏ったジェンダー意識のために支配する、されるという関係性があるなら、それを変えられるような働きを少しでも担えればと思います。

第62(定期)総会期のジェンダープロジェクトメンバーは、篠田茜(京都)、聖職候補生 下条知加子(東京)、司祭 金善姫(中部)、司祭 大岡左代子(京都)です。今総会期も「すべての人が尊重される教会・社会の実現をめざしてジェンダーの課題に取り組む」ことを大きなテーマとして活動いたしますが、具体的には意思決定機関への女性の参画推進、性的少数者の課題、女性の聖職に関わる課題、日韓の課題である女性の交流などを女性デスクや関係諸委員会などと協働しながら取り組んでまいりたいと思います。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたくと願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願ひにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ 5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より活き活きと用いられますようにという祈りと願ひをこめて名付けました。